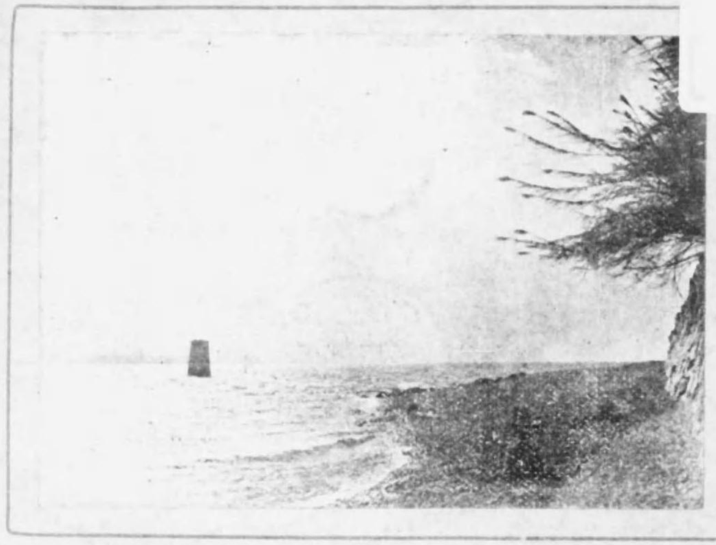


（鐵橋ヲ通シテ伊豫地ヲ望ム）

鄉土俗謠集

（全）

御手洗町青年團

特241
118

始

特241
118

磯標

桃山

蜜柑山ヨリ内海ヲ見下ス

白鴻ヨリ御手洗町全望

序

明眉な風光と、二千年來の麗はしい歴史とに育くまれた我等の郷土、其處には又いつの頃からか、優にやさしい、數々の歌も生れ育てられてゐます。

搗臼の歌、祭の歌、盆踊の音頭、等。

あわただしく流れ行く世に生活する吾人ではあるけれども、何れの時、何れの所でも常に快い響を幽裡にもたらせるものは、之等古里の歌であります。

殊に一人一度故郷を離るれば故郷の風物は常に其の心中を往來す嬉しき時にも故郷を思ひ、悲しき時にも亦故郷を思ふてゐの思ひ出に、ひたる時、卽ち、遠い異境に在りて、夕暗迫り山の端に出る月を眺めて故郷を忍ぶ時、必ず口づさむものは古里の歌であり、同郷の集ひの宴の最後に落ち着く所は故郷の盆踊とその音頭の節面白く調子ゆかしい場面であります。しかもかくする事によつて一層故郷戀しくなつかしさの情が深められるのであります。

かくも懐かしい郷土の歌も、時世の推移につれ古里から失はれんとする傾向のあることは、郷土人と

郷土文化研究会

して、悲しいことでなければなりません。この時に當り遠い異鄉の空、朝鮮と滿洲と境のあの鴨綠江、流す筏で有名な新義州に於て、立身出世せられ、特に其の奇行で偉名を馳せられた我御手洗の出身今田嘉吉氏は我町靑年團に對し、遠い異境に居らるゝ人にとりては特に感銘深い、之等鄉土の歌の編纂方を勸告せられ、多大の援助をさへ致され、團員諸君も亦、氏の申出に感激し、そこは若人の意氣と熱、感ずれば直に實行に移り卽ち茲に『鄉土俗謠集』なる本書が、出版されたのであります。今田氏並に靑年團の麗はしい鄉土愛の眞心よりはからずもかくも立派な歌集の完成を見るに至つた事は、我が御手洗町のため實に喜ばしき極みでありまして、求めらるゝ儘に所感を記し、以て本集の序と致す次第であります。

昭和十年八月

町長　鞆田　稔

目次

一、口　繪
一、序　文
一、御手洗小唄
一、御手洗女數へ歌
一、盆　踊　音　頭
一、櫓　囃　子

御手洗小唄

吉岡武雄作詞作曲

| 3 6 6 7 7 7 | 3 6 6 7 7 7 | i i i 7 |

| 6 6 7 7 7 | 6 6 7 6 7 6 4 3 | 2 2 2 2 3 4 6 4 |

| 3 3, 1 7 6 7 2 3 3, 1 7 || 6 6 4 3 6 7 i 3 |
ミタライオイデヨ

| 3 i 7 6 7, | 6 6 4 3 6 6 7 7 | 6 6 4 4 4 4 3 3 |
ヨヤサノサーチドリニオーーテ ウレシイタヨリチ

| 3 6 6 6 7, | 3, i 7 | 7, 7 6 4 | 6 6 7 7 6 6
コトヅケテ アーキノ ミタライ オテテガナー

| 4 4 | 3, 1 7 | 3 i i i i 7 | 3 6 6 6 7, ||
ルー ヨーー エンヤラセツセノ ヨーイヤナ——

藝妓手踊（其一）

御手洗小唄

御手洗おいでよ　ヨヤサノサ
　千鳥に逢ふて　嬉しい便りを　ことずけて
安藝の御手洗　おてゝがなるよ
　エンヤラセッセノ　ヨーイトナー

御手洗おいでよ　ヨヤサノサ
　春のいろまち　歌聲ひゞく　さんざめく
安藝の御手洗　おてゝがなるよ
　エンヤラセッセノ　ヨーイトナー

御手洗おいでよ　ヨヤサノサ
　夏の凉みは　潮風うたせて　あかし船
安藝の御手洗　おてゝがなるよ
　エンヤラセッセノ　ヨーイトナー

御手洗おいでよ　ヨヤサノサ
　秋の月見は　海にさそはれ　波にうく
安藝の御手洗　おてゝがなるよ
　エンヤラセッセノ　ヨーイトナー

御手洗おいでよ　ヨヤサノサ
　小唄まぢりの　爪彈きさせて　冬ごもり
安藝の御手洗　おてゝがなるよ
　エンヤラセッセノ　ヨーイトナー

御手洗おいでよ　ヨヤサノサ
　御手洗小唄　うたひつゞけて　かれるまで
安藝の御手洗　おてゝがなるよ
　エンヤラセッセノ　ヨーイトナー

御手洗おいでよ　ヨヤサノサ
　昔　エビスヤ　九十九女郎（ツクモジロ）で　今は寺

安藝の御手洗　おてゝがなるよ
　エンヤラセッセノ　ヨーイトナー

御手洗おいでよ　ヨヤサノサ
　なには馬關(バカン)は　帆を休ませて　船ぞろい
安藝の御手洗　おてゝがなるよ
　エンヤラセッセノ　ヨーイトナー

御手洗おいでよ　ヨヤサノサ
　櫓太鼓の祭の聲は　瀬戸にみつ
安藝の御手洗　おてゝがなるよ
　エンヤラセッセノ　ヨーイトナー

御手洗おいでよ　ヨヤサノサ
　よべばこたへん　下の大崎　しまのなか
安藝の御手洗　おてゝがなるよ
　エンヤラセッセノ　ヨーイトナー

（二其）踊手妓藝

（港の特異オチヨロ船）

御手洗女數へ歌

（大漁節ニヨル）

一ツトセ　廣い日本中に　名も高い
　御手洗女郎衆の數へ歌　サテ唄ひませう

二ツトセ　船乘衆こそ　妾等の
　可愛殿御よ大切に　サテ親切に

三ツトセ　御手洗港を　素通れば
　妾や招いて通しやせぬ　サテ行かしやせぬ

四ツトセ　夜毎に變る　枕數
　されど變らぬ吾が心　サテ一筋に

五ツトセ　いつも仲よく元氣よく
　櫓拍子に合せて勉めませうサテ勵みませう

六ツトセ　無理な願と　知りつゝも
　　祈りや氣もすむ住吉に　サテ頼みませう

七ツトセ　波に咲く花　女郎花（オミナエシ）
　　磯の香と塩加減　サテ味のよさ

八ツトセ　やさしい心を　いつも持ち
　　客の氣持に添ひませう　サテ盡しませう

九ツトセ　こまかい姿の　力でも
　　一心つとめて客の爲　サテ町の爲

十トセ　都會にまさる　御手洗に
　　奮闘努力で努めませう　サテ勉めませう。

盆　踊（町の若衆）

音頭集

お壇龜松……一頁
那須與市……八頁
お梅傳次……九頁
坊主落し……一二頁
越後くどき……一四頁
山崎三座……一七頁
阿波十郎兵衛……二〇頁
石童丸苅萱くどき……二四頁
鈴木主水……二八頁
小栗判官照手くどき……三五頁
阿波鳴門順禮……四〇頁
八百屋お七……四五頁

お鹽龜松

上之巻

下で九州筑前の國
善となるのは忘しき者よ
それにつけてもくどきが御座る
村を申せば出縣村の
九州第一富貴の生活
年は十七すみまい髪よ
凡そ村中に並びはないが
年は十四で蕾の花よ

善と悪との二つの道で
兎角悪には男子も女子も
郡申せば遠賀の郡
都合庄屋の太郎兵衛殿は
總領息子に名は龜松と
先は書き讀み三卷までも
それの妹にお壇と言ふて
先は縫針おはたの道よ
凡そ村中で並びはないが
妹お壇は實正の子なり
どうか致して龜松殺し
それぢや天知る地は地で知れる
數多集めて淨瑠璃本や
器量發明書き讀み迄も
兄の龜松先妻の子で
我子お壇に世がやりたさに
醫者を頼んで藥と云はうか
四つのすみから現れ出る

昔横山三郎殿は
先は毒酒の品付け見れば
かんぞ川魚ひいるやどじやう
はみの蔭ほし一味と合し
かめに納めて一室にかくす
かめに毒酒と三下り半よ
或日お壇は親御の前で
あなた悪所はもう止めなされ
この世からなる鬼じやと言ふて
兄の龜松殺してのけて
我にやるぞやわりやそりや嫌か
兄の命が助けと御座る
そこをのけよとつきのけるやら
そこをお壇がようよと逃げて
明み暗みに門まで出たが
裏の二階に泣く〳〵上る
燈す燈しみ目明りとして
何をめさるや兄上様よ

小栗判官殺した書物
山でつゝじやつるしの柿や
青いとかけやじようろすぐもや
谷の清水で生き虫といて
或日お壇が納戸に行けば
お壇見るより仰天いたし
妾は母さん意見が御座る
あんな悪所を他人が聞けば
何を言ふぞや我子のお壇
西や東のあの家倉を
西や東の家倉よりも
親にたてづく親不孝者奴
杖を振上げ打擲なさる
わしが死なねば一分立たぬ
ほんに兄さんに暇乞ひしよと
兄の龜松それとは知らず
書いつ讀んずのけいこー許り
親が親なり世が世で行けば

書いつ讀んずのけいこも要ろが
何を言ふぞや妹のお壇
お前殺すと毒酒のたくみ
誠そうかや妹のお壇
暮れの霜月十七日は
それを序でに六部に廻る
孝行盡して家倉貰へ
西や東のあの家倉に
親の悪所を子が言ふものか
六十六部の御供致す
神か佛か觀音様か
神じや御座らぬ佛ではない
ここちや六部の仕度も出來ぬ
そこへ行くなら仕度も出來る
金子倉にとお壇が忍ぶ
夜の九つ夜半の頃に
泣の涙で我が家を出でる
小倉本町二丁目の米屋

死ぬる身として書讀いらぬ
わしが母さん悪所が起きて
油斷なさると非業の死によ
わしもそんなら分別御座る
わしが母様十七年忌
其方は殘りて二親様に
何を云ふぞや兄上様よ
露や塵ほど心があれば
お前六部に行かんすなれば
誠そうかや妹のお壇
但しは未來の母上様か
わしはお前の妹のお壇
小倉町にて小母丈が御座る
夜の九つ夜半の頃に
親の金をば充分盗み
西や東の家倉すてゝ
急ぎ給へば小倉の町よ
行けば小母さん小薩に出でゝ

先に見えるは龜いぢやないか
われら二人は何しに來たか
村の若い衆と口論したか
所役人御意叛きやせぬ
親の勘當でここまではこぬ
わしが母さん十七年忌
六十六部に出て行く程に
我等二人は幼い身ぢやで
止まれ止どまれ先この度は
早く六部の仕度を賴む
紫檀黑檀唐木を集め
寄せた〳〵も八十と四人
七日振りにて成就な致す
そこで小母御の申さる樣に
小判四十両は餞別として
朝は早うたて夜道を踏むな
船の乘り降り氣を注けなされ

後に見えるはお塩じやないか
所役人御意叛いたか
親の勘當でこゝまで來たか
村の若い衆と口論はせぬ
暮の霜月十七日は
それを菩提の御爲として
早く六部の仕度を賴む
旅の他國へ出す事ならん
止まりませんぞ止まりません
そこで小母さん早推量して
小倉町なる大工を寄せた
てんつん刻みつかの佛檀を
負ふて立つのがかの八日振り
金に不自由はあるまいけれど
又も小母御の申さる樣には
宿場〳〵で氣を注けなされ
さらば〳〵と暇乞ひする

下之卷

小倉町をば托鉢いたす
急ぎ給へば四國に參り
八十八ヶ所札打納め
兄の龜松長柄の鍋杖
大阪町をば托鉢いたす
六十六部も數多けれど
足が痛くばお宿を進上
手負手拭水足袋脚胖
慈悲も善根も皆振り捨てゝ
東門跡西御門跡
虎の御門に菊桐の門
屋敷廻れば八町と四方よ
京都仕舞ふて東の方へ
心念じて拜めよお塩
京で叡山高野が望み
兄を恨めん男の身なら

そこで龜松四國が望み
四國四ヶ國殘らず廻る
そこで龜松大阪が望み
妹お塩は下げ髮どして
大阪町中のあの人々が
こんな六部は殊勝な六部
のどが乾けばお茶進ぜませう
それに取分け慈悲善根よ
そこで龜松京都が望み
先は禁廷の總門見れば
朝はせつない日暮の門
棟の高さが十六間餘
ここはお塩や黑谷樣よ
あけて拜めば三井寺樣よ
そこでお塩が申さる樣には
九万九千を皆巡る者

女人堂まで女は行けど
女人堂にてお塩を預け
そこで龜松信濃が望み
越すに越されぬかの大井川
兄の龜松お塩にくどく
兄を勇める妹のお塩
今朝の頃よりまた輕るござる
神や佛の通力持つて
浮いつ沈みつよう〳〵と渡る
日には行きくれ一宿致す
夜がな夜白らくごほーぎ話
參りおうせし下向の道で
醫者を賴んで病氣を問へば
別けてこの子はほうそのどやみ
聞いて龜松只泣く許り
兄を勇める妹のお塩
まだも正氣の確かな内に
表羽二重大振袖は

女人堂から女はならん
九万九千を殘らず廻る
箱根八里は馬でも越すが
渡りかけたる眞中頃で
お塩痛らかろうさぞ難儀かろ
背にかけたる彼の佛壇は
こんな兄樣愚かな人よ
今朝のからよりまだ輕るござる
渡りおうせし向ふの茶屋で
宿の主人が信心人で
明日は龜松善光寺詣り
妹お塩に病氣が附いて
旅の疲れや食ひもたれから
今度この度本腹ならん
旅の他國でどうなるものよ
わしが病氣にや藥は要らぬ
形見分けます兄上樣よ
宿の母さん形見で御座る

小判十両は御亭主樣に
前に下けたるしようぶの金と
是はお前に形見で御座る
是も兄さんお前に形見
手水使つて鏡に向へ
お塩奈落に沈むと思へ
秋の稻妻川邊の螢
遂に往生遂けさせ給ふ
何んぼ龜松泣いたかとても
早くお塩が葬禮仕度
綾の水引七下りして
寄せた〳〵も八十と四人
石の燈籠が四十八通り
金の燈籠が十六燈籠
七夜七七四十九日まで
是は信濃の油屋寄進
尼で觀音ならりようものか

又の十両は賴みの寺へ
四寸八分の白みの鏡
肌につけたる觀音行も
わしのお顏が見たいとあれば
鏡曇つて鐘ならん時
兄の膝をば枕といたし
すやり〳〵と眠るが如く
兄の龜松只泣くばかり
死んだお塩が歸るではない
輿や車やはた天蓋(テンガイ)や
信濃町中の坊主が寄せる
お塩葬禮さも賑やかに
是は信濃の石屋の寄進
是は信濃の女郎衆の寄進
燈す油のその代物は
お塩十四で觀音となる

那須與市

其の名ふれたる下總の國
姓は小兵に御座候へど
矢をば人手に名を萬世に
四國讃岐の屋島が磯で
平家方より沖乘る船に
九郎判官義經ごらん
與市御前に召出されて
其方を呼んだは余の儀ではない
矢頃定めて射落すなれば
かしこまりたと與市のお受け
かちん錦の小袖を召して
弓は重藤きりふの矢をば
小松原より浪打際へ
風は激しく浪高くして
與市暫らく眼をとぢて

那須の與市の譽の次第
積る御歳十九才にて
殘し給ひし所は何處
源氏平家の御戰に
的に扇を立てたる体を
與市／＼とのたまひければ
御用如何にと首をさげる
沖に立てたる扇の的に
敵や味方に見物させよ
與市其の日の出立衣裳は
小黄金造りの腹帶締めて
手綱かいこみ道半町も
しんず／＼と歩ませければ
的の扇が定まらざれば
南無や八幡那須明神と

得させ給へと願念深く
風は靜まり浪おろなれば
引いて放せば扇の的の
扇碎けて骨ばら／＼と
浮きつ沈みつ又浮上る
船の平家は船ばたたゝく
戰なかばで見物ごとは

れいは神樂で舞おさめつゝ
弓は重藤きりふの矢をば
要際にとふつゝとあたる
めけた扇が浪にて沈む
岡の源氏はゑびらをならす
與市功名澤山あれど
いかに與市とのたまいなさる

お梅傳次

しかけなをしてそれ佛法の
人の浮節我身の上は
扨てもお梅は如何なる生れ
殊に鼻すじ五三の器量
心島田に人愛すぐれ
從令かたなき出家の身でも
お梅十四の冬衣にて

荒い雨とは出で聞き給へ
從令かたなき出家の悟
目もと口もと首立ちのんで
笑顔ようきに扨て髪の上
古き松風村雨等に
草に育ちし梅とは見えぬ
傳次思ひは折々あれど

積る思ひは春落合の
交す枕の夜は永けれど
物も言はずに只泣くばかり
傳次心が驚となる
附けて廻せば月夜も暗も
かゝるためしはあら氣の毒や
妾はお前の兄八郎兵衛が
久遠定まる吉日定め
それと聞くより氣は針箱の
若しこれ〳〵この傳次さん
いとしお前に添ふことならぬ
二世とあるから未來で添うと
ものゝいけんで最後を急ぐ
江戸や薩摩へ行く身ではない
淀の掛橋渡りはきれぬ
我に添う夜もありそう海の
言ふに言はれぬ嬉しいわいの
中程ぐちより塗長持や

ほびき戻りにノウこなさんよ
思ひ乍らも只恐ろしや
戀の蕾が開いた時に
川に楓がちりちりやばらり
親のゆるさぬ非慾の契り
ほんにお前に知らせはないが
嫁にせんとて今日夕方に
前を直せと鏡の祝
底をたゝいて女の貞女
親の言ひじよに仕ふぞなれば
お顔見るのも今夜がかぎり
せまき袂に石拾ひ込む
傳次引留めこは何事ぞ
同じしるべの水呑むからは
時節松虫又轉び寢の
言へばお梅は納得致し
やがて嫁入りして行くわいな
内の殿御にやる詠み箱

ほんにそこらが青疊やら
二人おうせし姿を見れば
浪を防げや千夜のほむろ
社内時ちやと下女はした迄
家内殘らず苗田を植えに
そこへ傳次が茶桶をさげて
それはお前の心のうす茶
誰れがあたりに人聲がする
かゝる所へ兄八郎兵衛が
部屋に馳け込み浪黑鞘の
拔いた刀をお梅に浴びせ
かゝる所を傳次が止める
それをたまけて二親樣が
お梅苦しさかわねを上げる
育てられたる二親樣に
送りがたない此身の仕業

胸に火のしのもよぎの蚊帳や
惡くや腹立氣は大難の
ほむろ思ひにその夜も明ける
赤根たすきや赤前垂で
留守にお梅は茶を焚いてゐる
薄き匂ひを貰ふと言へば
もちと待たんせ戀茶が煮へる
さあさごんせと手を引きようて
是はどうかと言ふより早く
白刃刀をすらりと拔いて
歸す刀で我のど笛を
水よ氣附けよ地下醫者さんよ
お梅是れ〳〵苦しうないか
長い月日に短い命
育てられたる御恩の程も
生きて生き恥死に甲斐もない

坊主落し

下で中國長門の國で
萬小間物京屋の娘
お寺詣りの下向の道で
家に歸りて二階に上り
鹿の卷筆奉書の紙に
文の使は寺中間よ
和尚手に取り拜見なされ
世にも大氣な女で御座る
丸木橋かや文返される
頃は五月の上旬の頃
上に召したは奈良かたびらよ
さやの帶をばきつちやと結び
長い脇差小脇に差して
深い編笠おんとりかづき
高い所に腰打ちかけて

闕で千軒並びはないが
同じ町なる圓稱寺樣の
和尚見るより直ぐ戀となる
硯引寄せ墨すり流し
思ふ戀路を細やかに書き
和尚樣へと差上げければ
さてもよい手ぢやよい筆たちじや
是はならんと文返される
是非に此の身が行かねばならぬ
居りし手代の衣裳をば借りて
下に召したが白無垢小袖
印籠銀着腰煙草入れ
足袋は雲齊ばら緒の雪駄
夜の夜半や七つの頃に
沖に大船帆かける船よ

あれを見てさへ心が勇む
夜の事なら上門しまる
そこでお杉は利發な者よ
明り障子をすらりと明けて
和尚〳〵と二聲三聲
其こに立ちたは狐かまほうか
文をおこしたお杉でござる
わしは此町の半三が悴
人の習はぬ經文迄も
坊主落さば奈落に沈む
物にだん〳〵喩がござる
港見かけて一夜は泊る
露がおろせば一夜は泊る
和尚見かけてお杉が泊る
戀をなされたためしもござる
是非にかなはにや此の脇差しで
何をてんぽのかは一夜は落ちよぞ
酒の肴はたはらご生酢

直ぐに此身は圓稱寺樣へ
門にや門番海老錠が下りる
裏に廻りて墓道忍び
和尚居間にと早忍び入る
和尚驚き早目を覺まし
狐狸のまほうではないが
お杉よう聞け落らりよものか
七つ八つから出家となりて
今ちや淨土の開山坊主
そこでお杉は利發な者よ
沖に大船帆かけた船も
道に生えたる草木でさへも
森木見かけて小鳥が泊る
お釋迦さんさへ八十や三で
是非に今夜はお情け賴む
自害いたすとお杉が言へば
飲めや圓稱寺呼へやお杉
鯉の刺身やはも蒲鉾や

仲の良いよに中傘廻す
坊さんぢやとて男ぢやないか

末の良いよに末傘廻はす
わしが來たなら落さにやおかぬ

越後くどき

今日は大慈な御祖師樣の
皆がゆるりと茶を呑みまする
大慈大悲の御恩の程も
今日の精進あるまいなれば
一人泣々行かねばならぬ
あまり捨てたる大惡人を
あびの炎や紅蓮の氷
飢饉飢渴のひだるさつらさ
私一人の御身代りに
流し給ひし其の御血汐
わけて女人は罪深き故
變女男子のお願を立てゝ

御命日ぞや廿八日は
あまり渡世が忙しき故
けだい勝ちにて日々暮らす
死出の山路や三途の川を
十方三世の諸佛を御手に
阿彌陀如來の助けん爲めに
刄劍に掛らせ給へ
畜生三界修羅道の苦諫
汗や油の御血の涙
四大海より御恩が御座る
三十五の願起させられて
女人成佛誓はせられる

かゝる御苦慮かけまいらせて
釋迦は往來八千度も
生れ後れし我々なれば
またも泣く〳〵修羅道に歸る
扨ても嬉しさ勿体なさよ
僅か御歳九才の春に
輿や車や目元の御蝶
榮華榮耀の御身の上の
玉の冠ぬぎ捨て給ひ
御そりなされて出家となりて
墨の衣に召し替へられて
月の光や螢を集め
どうぞ末世の惡人女人
示し給へと毎日毎夜
峯に昇りて神々樣へ
そこで泣々六角堂へ
きらゝ坂とて其名も高い
百夜まんする曉方に

二度の嬉しさ勿体なさよ
代る代るが七世の出生
今日の御慈悲があるまいなれば
浮かむ時節は毛ないことよ
天津小屋根の御身孫とて
如何に我等が可愛いとても
月よ花よとなぐさみ給ひ
不足ないけど御痛はしや
山に昇りて御黑髪を
綾や錦をぬぎ捨て給へ
晝はひねもす夜は夜もすがら
御經御學に御心盡し
直ぐに御法を敎へる知識
谷に下りて菩薩に祈り
祈請なされど其印なし
毎夜毎夜の歩をなさる
難所峠を徒歩はだしにて
たんとお告けをこうむらせられ

嬉し涙に咽せさせられて
尋ね參りて御弟子となる
然る所があら恐ろしや
嫉(ネ)たみそねみて兩上人を
お成りなされて御痛はしや
ほんに厄幸(ワザワヒ)とやら
こんな邊僻(ヘンヒ)に生れた我ら
彌陀の御誓ひ聞き分けられよ
我等御國は御恩が深い
今は他力の御敎へ信じ
助け給へも助かる法も
ありとありつるあら有難や
命永らくあるその内に
寢ても覺めても立つても居ても
祝ごとにも泣く悲しさも
嬉しかろうと又かるまいと
今も無上の日暮になれば
わくや車やこがせや等で

東山なる吉水寺へ
彌陀の本願御弘めなさる
南都北都(ホート)の惡僧達が
土佐と越後へ流され人に
言ふに言葉も勿体なさよ
かゝる御苦慮あるまいなれば
地獄必定極惡人が
六十四州は數多けれど
國中普ねく其の印には
南無の六字は眞行具足(グソク)
何も彼も皆此六つの字に
五世の大事を如來にまかす
彌陀の大恩しつかりにない
行くも歸るも時所なく
笑ふ顏にも腹立つ折も
何もかまはず南無阿彌陀佛
死出の山路を越ねばならぬ
無限地獄の火は防がれぬ

今が思案の大事や程に
野山かせぎや糸繰つむぎ
勤しながら念佛申せ
佛は大惡見通しなれば
それをかまはず南無阿彌陀佛
親子諸共一蓮托しよ
かゝる大恩いたゞく故に
日並よければ洗濯します
こうこ大根なびかにやならぬ
横が足らんのこがせをくるの
要らぬ口をば動かすよりも
人の指圖は受けぬがよいぞ
我身引受たしなみなされ

かせぎ止めよと言ふではないが
みせん奉公も浮川竹も
人にそしられけなさりよとても
しろし召すよと心に思ひ
かゝる淨土の蓮池(ハチス)の上で
無量永劫たのしむばかり
逮夜(タンヤ)參りをせぬかと云へば
花も摘みごろ畑の草や
又の逮夜(タンヤ)はどうかと云へば
頭痛しますと言譯ばかり
御禮報謝の南無阿彌陀佛
永い忘れは致さぬように

山崎三座

島の初めは淡路が島よ
國は五畿内山城の國

大和山城山崎三座
器量吉野の櫻木育ち
小判四十両で身を賣りまかす
寒のしはすも日の六月も
三座馬子唄歌ひし時は
輪中世界は龍宮迄も
雲を方界空飛ぶ鳥も
數多朋輩打連れ立ちて
伏見町なる大官樣の
三座馬子唄それ聞くよりも
姿良ければ心もよかろ
なれど玉代が屋敷とあれば
其れの内なる格子にもたれ
二人親達心配なさる
大社〳〵へ祈請をかけて
玉代病氣が本腹ならん
すやり〳〵と眠るが如く
二人親達只泣くばかり

なれど三座の育ちを聞けば
親の慣いで酒井屋樣へ
賣られ行くのが八歳の年で
駒の手綱で月日を送る
天は宇宙よ地は奈落迄
浮み上りて苦しみのがれ
羽を靜めて聞程の聲
伏見町中を歌ふて通る
其れの世繼の玉世の姫が
聲が良ければ姿も良かろ
一目見たいと山崎三座
門はかけ置き出ることならん
見たい〳〵が病氣となりて
凡そ日本六十余州の
星の祭りもして見たけれど
秋の稻妻川邊の螢
遂に往生遂げさせ給ひ
なんぼ親達泣いたかとても

死んだ玉代が歸るではない
輿や車やはた天蓋や
玉代葬式さも賑やかに
右の三座が歌ふて通る
お乳母男に名は市介と
三座不思議と立止まりて
無禮致した覺えはないが
御用如何にと首を下げて
これの御世繼ぐ玉代の姫が
見たい〳〵が病氣となりて
扨てもさやうな事にてあれば
手には珠數もち花桶下げて
これぢやすむまい掘り出して見よ
一鍬掘りては馬子唄歌ひ
四方棺桶ふた取り見れば
こぼす涙が口に止どまり
死んだ玉代が大熱となる
小判四十両は酒井屋樣に

早く玉代の葬禮仕度
綾の水引七下りして
玉代死にたる七日の夜に
玉代育てしお乳母が御座る
それが呼止め三座を招く
伏見町なる大官樣に
駒をおいたて御門につなぐ
そちを呼んだは余の儀ではない
そちの馬子唄それ聞くよりも
こがれ死んだぞ嘺三座さん
御墓參りが致しと御座る
墓に參りてそとわに座る
一鍬掘りては南無阿彌陀佛
三鍬四鍬と掘り出しあげて
死んだ玉代は只しよんぼりと
止まる涙が氣附けとなりて
黄泉(よもつ)かへれば枯木に花よ
身受金ちやと送らせ給い

お前百迄わしや九十九迄　　共に白髪ののう生える迄

阿波の重郎兵衛

阿波で海賊かの十郎兵衛が　　庄屋勤めて居るとは聞けど
見かけばかりでうちやすりきりよ　　内の構へが千石取で
夫れの手下に惣七と言ふて　　惣七女房にお仙と言ふて
阿波で一ヶ國世にない器量　　別けて目につく十郎兵衛さんは
惣七大阪に上りた留守に　　裏の窓から覗いて見れば
お仙居る〳〵茶を焚いて居る　　そこで十郎兵衛表へ廻る
お仙まめなか享主はどこへ　　亭主大阪へあいだま積んで
上りなされやお茶煙草なと　　お茶も煙草も所望でないが
飲めば四方山話の種よ　　欲しもなけれど素茶がぶ〳〵と
お仙一人で寂しうわないか　　一人と思へば寂しさどうも
一人と思へば寂しうはあるが　　言はれませぬとほやりと笑うた
そこで十郎兵衛が寝轉びかゝる　　枕二つに莫蓙一枚で
今宵一夜を話そやお仙　　こんな十郎兵衛さん異なこと云やる

隣近所の娘子達に　　意見しそうな旦那となりて
譯もないこと姿や嫌らしや　　不甲斐なうても惣七と言ふて
きつと主ある此の身でござる　　そこで十郎兵衛恥かゝされて
戸口出しなの其の悪口に　　己よう言ふた後日の内に
思ひ知らすぞ目に物見せる　　内に戻りてこばやを下す
三丁こばやに櫓を四丁立てゝ　　村の若衆を舵子(カコ)よと頼む
村の若衆はや推量して　　人を助ける舵子なら行こうが
人を殺める舵子なら行かぬ　　行かにやよい〳〵もうよい程に
親の代から五百目のお金　　算用して〳〵きり〳〵拂へ
背と腹なら行かねばならぬ　　表やかたに十郎兵衛乘せて
錨くれ〳〵とも綱放せ　　ヤンサおせ〳〵大阪の川へ
ここは何處かと若衆に問へば　　ここは大阪一の州川よ
惣七宿屋は何處かと問へば　　南堀江の阿波屋の平次
裏の窓から覗いて見れば　　惣七居る〳〵仕切の段よ
今度あい玉七船(ハイ)の金　　仕切しまうて酒飲む所
お酒しまうて暇乞ひする　　大阪川口潮風問へば
潮は下(サケ)潮北東風嵐　　東風の嵐に帆を巻上げて
とろり〳〵と後から流す　　汐は逆(ム)き來る風まぢとなる

室や兵庫の沖へと繫る
あれに見えるは惣七の船よ
お船御免と火を貸しなされ
惣七ようよと割木で止める
かゝる因果や首打ち取られ
表屋方の甲板の下で
四人舵子の衆助きよと云へば
親の敵は子が取るものよ
惣七荷物を我船に積む
誰れが來たとてこの質物は
そして質屋に頼んでおいて
お仙元氣なか惣七はまだか
惣七なんどに會はんどお仙
今の言葉に聞きよが御座る
七日七夜の通夜ごもりして
神の社に高草はやす
參る氏子を皆拾ひ呑む
七日ぶりにてお告げが御座る

あれに見ゆるは阿波船ちやそうな
惣七船をば目掛けて押して
火をも借らずに拔身でかゝる
いつも變らぬ諸身の育ち
惣七息子に新七と言ふて
苦をかべりてひよ〳〵しとる
自体十郎兵衛惡性の人で
言ふて其の子も首打取られ
室や兵庫の質屋に預け
わしが置いたと言ふては臭れな
内に戻りて惣七の方へ
わしも此度大阪に往たが
そこでお仙は利發な奴で
所氏神明神樣へ
それでお告げが無いぞとあれば
前の小池の大蛇となりて
ほんに恐ろし女の心
惣七敵が打ちたいなれば

室や兵庫の質屋を探せ
内のほんちを丁稚に連れて
室や兵庫の質屋を探す
そこで主人が善い客と見て
それぢや御座らぬ其の奥の間の
こんなお客は異なこと云やる
お前一人の常紋でない
袂底にて縫印あり
それで言はねば御上にしやうか
七日後にて十郎兵衛さんが
あらま嬉しや敵が知れた
そうこう言ふ間にお上に知れた
裏に八人表に八人
二つ責苦がなんまる責めよ

あーら嬉しやお告げじやそうな
縞の財布に金チョト入れて
古手買ひましよ古手屋主人
あれやこれやと皆拾ひ出す
そばにおしきの柏の紋は
そばにおしきの柏の紋は
まだも確かな證據がござる
お仙惣七の縫印あり
背と腹なら言はねばならぬ
預け置かれしこの質物よ
内に歸りて白裝束や
十郎兵衛捕手が十六人餘
一の責苦が水責め火責め
三つ責苦がくちなほ責めよ

石童丸苅萱くどき

過し昔の其の物語り
峰に紫雲のたなびきまして
哀れなるかや石童丸は
顔も知らざる父上様が
尋ねさまよい行く谷道の
右手(ノテ)は烈しき御山(オン)颪
蹈みも通はぬ丸木の渡し
身を托(ヅカ)して往く先問へど
加藤左ヱ門繁氏様は
變へて佛法修行の爲めに
辿り行くのも後の世の爲め
傍に思はず立寄り給ひ
茲のお山に今道心が
聞いて苅萱御坊の仰せ
思尋ねる其の人さんの

國は紀州に其の名も高き
高野山とて貴き山よ
斯かる難所をたど〳〵歩み
此處のお山にお在すと聞いて
後や先なる左手(ユンデ)は巖間
不動坂をば見上げて通る
心細道便りの杖で
岩根の松の木影にかけて
髪を卸して名を苅萱と
晝夜に限らず此山坂を
親子奇縁か石童丸は
申上げます御出家様よ
お在はしますなら敎へてたべと
昨日そつたも今道心よ
俗の名を言ひ尋ねてよかろ

尋ねますのは父上様よ
元は筑紫の松浦黨よ
聞いて驚き吾子であるか
思ふ心を漸く靜め
事はここぞとよそ〳〵しくも
慕ひ來りし其の志
嘸や嬉しく飛立つように
此の御山の習ひと言ふは
名乘り逢ふ事勝手にならず
母御大事に侍き給へ
敎へ諭せば石童丸は
母も諸共此麓まで
道の疲れに煩ひまして
一目逢ひたい見たいと歎き
父の在所を御存じならば
抑へ兼ねたる其有様を
吾れが親ぞと名乘らんものと
言ふて遙々尋ねて來たに

吾等二つの其の年別れ
加藤左衛門繁氏様と
既に取り付き給はんものと
御佛前にと誓ひを立てし
年端も往かいで遙々ここへ
誠父上聞給ふたら
思ひ給はん去りとては又
例令廻りて逢ふたればとて
早く故郷に立歸られて
夫が一つの孝行なりと
國は大内に攻め惱まされ
父を尋ねて參りしなれど
命ある内父上様に
哀れ不愍と思はれ給ひ
敎へ給へと目に持つ涙
見るに苅萱心の内で
御勿体ない師の戒めと
知らぬ顔なり見ぬ顔なれば

不然增りてどうなるものと
堪え兼てぞ思はずワッと
情ないかな世の境涯は
吾が發足の昔捨てゝ
送る中にも我妻や子は
念珠繰りては其事ばかり
廻り〳〵て我子に逢ふは
親子一世と聞き傳ゆれば
立てし誓は破りもされず
未來永劫逢ふ事ならぬ
胸に悶びて心の内は
夫れと悟りて石童丸は
もしや貴僧が父上樣か
袖に縋れば繁氏樣は
既に親ぞと心も亂れ
思ふ心を後ろの山の
きおんにうむいの誓を忘れ
前後忘れし茫然聖

胸に堰き來る血の涙をば
聲を立てゝぞ歎かせ給ふ
思ひ出づれば樣々變る
出家堅固で此年月を
最早本年で幾つになると
思ふ所を今日此道で
よもや佛も御存じなかろ
たつた一言物言ひたいが
茲で逢はれぬ事なら猶も
何としやうか如何しやう物と
泣かぬ顏程猶又辛き
左樣お歎きなされし上は
早う聞かせて下されませと
共に曳かるゝ恩愛故に
今に名乘りて聞せんものと
岩の影より聲高らかに
給ふまいぞと師の教訓に
夢の心に聞えし故に

ふつと氣が付き振り回へり見て
こんし三界必是御生
誠師匠に面目なしと
己が尋ねる繁氏殿は
諸國修行に出させ給ひ
急ぎ下山し母親樣の
聞いて石童涙を流し
父はお山にお在せしゝのを
吾はともあれ母上樣が
何としようか夫ばつかりが
人を助ける役目と聞けば
父に肖よりし人でもあれば
悲し心を思ひやられて
腹紗包みの藥を出して
護摩を焚かれて調合ありし
母に用ひて看病あれよ
疲れ足では中々往けず
平地同然馬駕籠あれば

迷ひましたよ誤りました
何れ吾子と思ひましようか
着たる衣の袖打拂ひ
此處のお山に在せしなれど
今は行衛も知れざる程に
病氣介抱召さるがよかろ
情ないぞや嗚淺ましや
既に行衛の知れざるよし
焦れ死でも爲されうならば
私や悲しい御出家樣は
哀れ不愍と思召れて
探し下さりませうと口說き
さすが繁氏胸さく思ひ
是は師匠が二萬の度の
誠尊き妙藥なれば
そこな道筋難所であれば
此方廻れば花坂と云ふて
急ぎお山を下るがよいと

心強くも先やりければ
藥片手に押戴いて
道に必ず迷はぬ樣に
教え乍らも苅萱殿は
緣に引かるゝ纜（トモヅナ）故に

涙乍らに石童丸は
是非もなく〳〵別れて還る
彼方此方の事細やかに
心もとなき又氣遣ひさ
見えつ隱れつ別れ行く

鈴木主水

花のお江戸の其側で
處四ッ谷の新宿町よ
音に聞えし橋本屋とて
お職女郎の白糸こそは
愛嬌よければ皆人さんが
別けてお客は何處かと問へば
鈴木主水と云ふ侍よ
五つ三つは惡戯盛り
日にも毎日女郎買なさる

扨も珍らし情死（シンジウ）咄
紺の暖簾に桔梗の紋は
數多女郎衆のある其中に
年は十九で當世育ち
我も〳〵と名指して上る
春は花咲く靑山邊の
女房持ちにて二人の子供
二人子供のある其中で
見るに見兼ねて女房のお安

或日我夫主水に向ひ
妾女房で嫉くのぢやないが
十九や二十の身じやあるまいし
止めてお呉れよ女郎買ばかり
どうせ切れるの六段目には
二つ一つの思案と見える
子供二人と妾の身をば
言へば主水は腹立ち顏で
人の意見も聞かないわしに
愚痴なそちより女郎衆が可愛い
其方のお里へ出て行かしやんせ
又も主水はこやけになつて
後でお安はヤレ口惜しやと
死んでみしよーと覺悟はすれど
死ぬにや死なれぬ歎いて居れば
是さ母さん哺母さんよ
氣色惡くばお藥上れ
言へばお安は顏振上げて

コレサ我夫主水樣よ
子供二人は伊達には持たぬ
人に意見もする年頃で
金の成る木は持ちやなさるまい
連れて逃げよか心中しよか
併し二人の子供が不憐
末はどうする主水樣よ
何を小癪な女房の意見
女房位の意見ぢや止まぬ
夫が嫌なら子供を連れて
愛想づかしの主水樣よ
出でゝ行くのも女郎買姿
如何に男が我儘じやとて
五つ三つなる子に引かされて
五つなる子が側へと寄りて
どこぞ痛くば擦りて上げよか
坊が泣きます乳くださんせ
何處も痛くて泣くのぢやないが

雜なけれどもよく聞け坊や
意見申せば小賢な奴と
扨も殘念夫の心
後に殘りしわれらが不憫
さらばこれから新宿町の
出で〻行くのもさも哀れなる
店の暖簾の橋本屋とて
夫と見るより小女郎を招き
妾はこの屋の白糸さんに
アイと子女郎は二階に上り
どこの女中か知らない人が
會ふてやらんせ白糸さんよ
妾を尋ねる女中と言ふは
言へばお安は初めて會ふて
あなた見かけて賴みがござる
國の務を疎にすれば
ここの道理をよく聞分けて
意見なされてくださんせ

そちの父さん身持ちが惡い
たぶさ攝んで打擲なさる
自害しやうと覺悟はすれど
どうせ女房の意見ぢや止まぬ
女郎衆賴んで意見をしやうと
行けば程なく新宿町の
見れば表に主水が草履
これさ姐さん喃ねえさんよ
どうぞ會ひ度い會はしてお呉れ
これさ姉さん白糸さんよ
何かお前に用ありそうに
あいと白糸二階から降りる
おまへさんかへ何用で御座る
わしは青山主水が女房
主水身分は勤めの身分
逐にお扶持もはづる〻程に
どうぞ我夫主水殿に
せめて此子が十歳にもならば

晝夜揚げづめなさりよと儘よ
お前女房にならんすとても
三度來たなら一度は揚げて
言へば白糸理窟に困り
女房持ちとは夢更知らず
嘸や惡かろお腹が立たう
意見しませうかお歸りなされ
跡で二人の子供を連れて
逐に白糸主水に向ひ
お前女房が子供を連れて
今日はお歸り止めては濟まぬ
置いてお呉れよ久しいものヨ
待て暮せど歸りもしない
最早其の日も夜も明ければ
主水身持ちが不埒な故に
後でお安は途方に暮れて
聞いてお安はヤレ口惜しやと
扶持に放れて永らへ居れば

又は妾しが去られた跡で
何卒其の時迄でに來たなら
二度の意見をして下さんせ
妾しや勤めの身の上なれば
ほんに今迄戀ひ信んじたが
妾しも是から主水樣に
言ふて白糸二階へ上る
お安我家へ早歸りける
これさ我夫主水さんよ
私を賴みに來ました程に
言へば主水はニッコと笑ひ
逐に其の夜も居續けなさる
お安子供を相手に致し
支配方よりお使ありて
扶持も何もかも召し離されて
跡に殘りし子供が不憫
思案し兼ねて當惑いたし
馬鹿なたわけと言はりよよりも

武士の女房ちや自害をしよと
硯取り出し墨すり流し
涙止めて書置いたし
二人子供の寢たのを見れば
思ひ切れ刄を逆手に持ちて
二人子供は早目を覺まし
五つなる子は背中に縋り
稚な心で只泣く許り
女郎屋立出でほろ〳〵醉ひで
表口より今戻りたと
これさ父さんお歸りあるか
ものも言はずに一日お寢る
御意は反かぬ喃父様よ
聞いて主水は驚き入りて
見ればお安は血汐に染まり
自害したかや不憫な事と
膝に抱き上げ可愛や程に
我等二人が可愛い程に

二人子供を寢かして置いて
落つる涙が硯の水よ
白き木綿で我身を卷いて
可愛〳〵で兒に引かされて
グッと自害じや刄の下に
三つなる子は乳にと縋り
これさ母さん喃母さんと
主水夫れとは夢露知らず
女房じらしの小唄で歸る
言へば子供は馳け出でながら
何故か母さん今日にて限り
ほんに今迄惡戯したが
何卒詫して下されましと
合の唐紙さらりと明けて
わしが身持ちが不埒な故に
涙乍らに二人が子供
何も知らない能く聞け坊や
母は此の世の暇ぢや程に

言へば子供は死骸に縋り
私二人は何うしませうと
旦那寺へと急いで行つて
哀なるかや女房の死骸
三つなる子を前にと抱へ
行けばお寺で葬りまする
女房お安の書置き見れば
扶持も主水も仰天いたし
急ぎ行くのは白糸方へ
したが今宵はお歸りなされ
襟にかけたる戒名出して
妾が心が惡いが故に
左ればこれから三途の川も
言へば主水は暫しと止め
お安様への言譯立たぬ
二人子供を成人させて
言ふて白糸一と間に入りて

もうし母さん何故死にました
歎く子供を振捨て置いて
戒名貰ふて我家へ歸る
莚に包んで背中に負ふて
五つなる子に位牌を持たせ
是非もなく〳〵我家へ歸り
餘り勤めの放埒な故に
又は門前拂ひと讀みて
子供泣くのを其儘おいて
扨はお出でか主水様よ
言へば主水は其物語り
見せりや白糸手に取り上げて
お安さんにも自害をさせた
お安さんこそ手を引きましよと
妾とお前と心中しては
お前死なずに永らへしやんせ
回向賴むよ主水様よ
數多朋輩女郎衆を招き

櫛や笄かんざし迄も
妹小春が不思議に思ひ
今日に限りて讓りを出して
言へば白糸よく聞け小春
人に賣られて今此廓で
勤めましたよ主水様に
今度妾故御扶持に放れ
夫に私が生成居れば
死んで意氣地を立てねばならぬ
妾が爲にと香向を賴む
口の内にて〻一人言
私故にと命を捨てゝ
死出の山路も三途の川も
南無と言ふ聲この世の別れ
人に情けの白糸さんが
殘り惜しげに朋輩達が
今は主水も詮方なさに
子供二人に讓りを置いて

讓り物とて女郎衆にやれば
これさ姉さん何うした譯か
夫にお顏も勝れもしない
妾は幼き七歳の年に
辛い勤めも早や十二年
日頃年頃懇親したが
又も女房に自害をさせて
お職女郎の意氣地が立たぬ
早くそなたも身儘になりて
言ふて白糸一間に入りて
涙乍らに喃お安さん
嘸やお前は無念であろが
共に私が手を曳きませうと
數多朋輩皆立寄りて
主水さん故命を捨てる
別れ惜しみて歎くも道理
忍び密かに我家に歸り
直ぐに其儘一と間に入りて

重ね〳〵の身の誤りに
子供二人は取殘されて
稚な心は哀れなものよ
義理を立てたり意氣地を立てゝ
聞くも哀れな話で御座る

小栗判官照手くどき

騷動咄(バナシ)や心中くどき
都九條に其名も高き
日日勤める大内御所の
花も欺く美男で御座る
或日小栗は花見に出でゝ
酒の機嫌で三曾呂ヶ池の
笛を取出し吹込む音色
池の大蛇も其音に浮れ
何時かそろ〳〵小栗の側へ

我と我身の一生捨つる
西も東もわきまへ知らぬ
數多心中のあるとは言へど
心合する三人共に

世上世間に數ある中に
小栗判官政清様は
數多(マヽタ)つめたる公卿衆の中に
頃は卯月の卯の花盛り
花見歸りの其道すがら
側の木の根に腰打懸けて
天に通じて地に泌み渡り
娘姿と容貌(カタチ)を變へて
寄れば互に顏見合せて

是も因緣(インネン)づくでもあろうが
これが後々小栗がために
扨ても小栗は大蛇と契る
親の情けで殿原連れて
是非も泣く〳〵常陸の配所
こゝに閑居の身分となれり
强盗切取り横山殿の
京に名高き照手の姫を
是を悖に娶(メカ)す所存
一人往々思案をいたし
このや非常の惡黨の悖
思ひつめたる心の内は
或日小栗の御殿へ來る
相模横山照手の話
色の取持ち後藤に賴む
相模照手に文差出せば
逢も見もせぬ戀路の文を
歸り返事に一首の歌を

逢に其場で契をこめる
仇となるとは夢更ら知らず
其のや科(トガ)にて常陸の國へ
名殘り惜しくも都を出でゝ
玉の御殿に方丈造り
夫れは扨置き相模の國に
親ィ四人は惡心者よ
盗み奪ふて我が家に入れて
今は照手も十九となりて
たとへ命がなければとても
何の枕が交(カハ)さりよ物か
流石稀なる女で御座る
相模廻りの小間物賣りが
聞いて小栗は文認(シタタ)めて
直ぐに後藤は其場を立ちて
封じ開いて照手の姫は
流石後藤の理につまされて
書いた短冊後藤に渡す

道を急いで小栗へ渡す
十人余りの殿原連れて
國は相模の鎌倉通り
夫と聞くより惡人親子
手並見てから聟にもしよと
直ぐに庭へ案内させる
扨ても恐ろし岩窟の内に
流石小栗は公卿衆の流れ
馬をなだめてスラリと乘つて
月も照手と晴れての夫婦
サラバ祝言させようものと
小栗殿原毒酒と知らで
見るも中々哀れなことよ
馬を早めて馳付けなさる
醫者や藥で介抱いたす
親の惡事でうつろの船で
ゆられ流され行先知れず
濱へ着いたが五月の二日

歌の心も曇らぬ照手
照手方(ガタ)へと押入聟に
音に聞えし横山殿の
巧(タクミ)み置いたる鬼鹿毛(オニカゲ)馬の
聞いて小栗は支度をいたし
そのや庭は岩窟の造り
虎を欺く鬼鹿毛なれど
殊に武術も達人なれば
馬の上にて武藝の遊び
親の横山巧みも外(ハヅ)れ
酒と肴を整え列べ
飲めば血を吐く其の苦しみは
小栗二人は藤澤寺へ
寺の和尚が死人を貰ひ
ここに哀れや照手の姫は
しかも其の日は四月二十日
逢はぬ辛さの上總の國の
是を見付ける漁人(スナドリ)船頭

六ッの濱にて照手の姫を
直ぐに我家へお供をいたし
醫者や藥で介抱いたす
何日か嫉妬の心が起る
六ッの濱から連れ來たなど〻
内へ入れたがわしや口惜しい
辿も置くなら妾出さしやんせ
どうぢや〳〵と腹立ち涙
一人すご〳〵中仙道へ
之も前世の約束事か
夢でなりとも逢ひたいものと
朝な夕なに心で拜み
嘸や御無念怨みもあらう
妾しや此家へ八歳の年に
育てられたは十一年よ
知らぬ他國で月日を送る
北野天神天滿宮へ
敵横山親子の者を

船の中から手を引連れて
内の者にも一々咄し
月日送れば宿なる女房
扨ても女房は夫に向ひ
わしを欺してアノ女郎さいを
そんな事とは夢更知らず
夫が出來ずばあの女郎(メロー)さいを
今は照手も理につまされて
何處をあてどにうろ〳〵歩き
國で別れし我が夫さまに
肌身離さず觀音樣と
露の布團や草葉の蔭で
妾が爲めにも敵の親子
盜み取られて横山殿に
辿り〳〵て今此里の
京に名高き大社が御座る
日々に小栗は日參いたし
何卒御利益力を添へて

本望遂げさせ給へと祈る
諸國神佛願拜いたし
心ばかりの菩提の爲めと
兩手合せて差うつむいて
額に書いたる松竹梅の
小栗判官政清とあり
今日は小栗も大願果し
嬉し涙に物をも言はず
死んで別れし妹背の中に
堅く結ぶの神々樣の
やがて十人殿原達も
敵横山親子の奴原(ヤツラ)
同勢引連れ相模の國の
是にしばらく逗留いたし
死んだ死骸の石碑を賴み
數多お弟子を殘らず集め
南無やたんのうとらや〳〵と
今に殘せし馬頭の二字に

夫と知らねど照手の姫は
果てし我夫殿原達の
或日北野に參詣いたー
神の燈火(アカシ)でお宮を見れば
扨ても奇麗と眺める額に
はつと驚く照手の姫よ
參り逢ふたが妹背の緣か
貞女立てたる女の操
神の惠みで又逢ふことは
御引合せと喜ぶ二人
集ひ合せて相模の國の
さらば討取る支度を致す
今に殘りし藤澤寺よ
住持和尚に金子を出し
言へば和尚が石塔立て〻
袈裟や衣や水晶の珠數で
お經了れば政清樣は
祭り給ふは鎌倉寺よ

寺の内にて敵の支度
支度繫ひ横山親子
裏と表を取り圍まれて
中で小栗は親子の首を
敵討ちたもお神の利益
小栗照手の譽れを殘す

鎖かたびら小手脛當に
只一討ちに討取るべしと
吾も〳〵と恨の刄
右と左と兩手に提げて
何れ首尾よく本望遂し

阿波の鳴戸順禮

こゝに憐れな順禮口說き
阿波の鳴戸の德島町よ
家の寶の刀の詮議
國を立退き夫婦の願ひ
授け玉へやアノ國次の
心靜めて目配りなさる
九尺二間の借家をいたし
三ッ成る子を我家に置て

國は何處よと尋ねて聞けば
主人忠義な侍なるが
何の不運か寃の難儀
神や佛へ心願掛けて
刀商賣研屋の見世は
行けば大阪玉造りにて
其處や彼處と尋ねんものと
最早七年婆樣育ち

子供乍らも發明者よ
親の行衛を尋ねん物と
永の暇の旅立願ふ
隣り近所のあの子の樣に
失が私はうらやましいよ
諸國西國順禮姿
娘お鶴と書いたる文字が
白の脚胖に四ッ路のわらじ
襟には布施鐘かけたる儘に
何卒父樣アノ母樣に
三十三番殘らず拜見
年は漸々十にも成るが
哀れなるかやアノ婆樣に
扨も優しき順禮娘
別れ行くのか紀州を指して
二番紀の國其三井寺よ
父と母とのめぐみも深き
五番河内に其名も高き

年は十にて其名はお鶴
育てられたる其婆さんに
モーシ婆さんアレ見やしやんせ
髮を結ふたり抱かれて寢たり
今日は是非ないお暇いたし
脊に負笈六字の妙號
墨でにじみて姿が薄い
左杖にて六部にはしより
大慈大悲の觀音樣よ
逢て見たさに兩手を合せ
西も東も分らぬ娘
扨も優しい順禮姿
別れ行くのが扨口惜しい
哀れなるかやアノ婆さんに
靈所一番アノ那智山に
三に東國粉河の寺よ
四番和泉のまきしの寺よ
參り寄りくる其人々も

願ひかけるは不智伊の寺よ
讀んで終りし其道筋を
音に聞こえし玉造にて
報謝願うと其いふ聲も
お引き合せか前世の緣か
我も〳〵と皆出で見れば
母のお弓は我子と知らで
見れば愛らし順禮娘
俺は阿州の德島町よ
逢ひたい見たいと遠どの道を
聞いてお弓はハヤ氣に懸り
ソコデお鶴が申する事に
俺を婆さんに預けて置いて
ソシテお前の二親達の
俺が父さん十郎兵ヱといふて
聞いてビックリお弓が心
側に摺寄りお鶴が顏を
覺えあるのか額の黑子

花のうてなに紫の雲
行けば程なく大阪町よ
門に立たる順禮娘
神の惠か觀音樣の
軒を並べし其家續き
扨もしほらし順禮娘
報謝進上と側へと寄りて
國は何處よと尋ねて聞けば
ソシテ父さんアノ母さんに
一人廻國するので御座る
一人旅とは何うした譯よ
譯は知らぬが三ッの年に
何處へ行つたか行衛が知れず
お名は何とじや聞してお呉れ
母はお弓といふ事なるを
胸はせき上涙を流し
穴のあく程しみ〴〵ながめ
年も行かぬが遙々こゝへ

尋ね來たのを其親達は
儘にならぬが浮世の習ひ
名乘る事さへならぬが浮世
顏も處も知れない親を
なんの詮なき事ではないか
歸らしやんせよ婆さん方へ
言へばお鶴が其挨拶に
假令いつまで尋ねてなりと
ドンナ苦勞も厭ひはせぬが
何處の家でも留めては呉れず
人に叱られ打たるゝばかり
余所の子供や姉さん達を
俺が父さんアノ母さんは
早う尋ねて逢ひたい物よ
我を忘れてハヤ抱き上げる
母のお弓は名乘りも出來ず
モーシおばさんナゼ泣かしやんす
俺しやお前が母さんの樣で

嘸や見たなら嬉しくあらふ
親に備り子を產れても
其方のように尋ねて逢れぬ時は
若しや尋ね尋ねて逢れぬ時は
扨もこれから心を直し
父も押付け戻るであらふと
俺しや戀しいアノ母さんに
父と母とに逢たさ故に
幸ひ事には一人の旅よ
人の軒場や野山に寢ては
ホンに悲しや危なや恐わや
見るにつけてもうらやましいよ
何處の何國に居やしやんすのか
云へばお弓は涙にくれて
ハットばかりに扨胸騷ぎ
娘お鶴は抱れておりて
余り其樣にお嘆きあれば
歸りともない行きともないよ

ドンナ事でも致しませうが
云へばお弓は尙胸せまり
歸しともない遣りともないと
こゝへ置いてはお爲にならぬ
歸らしやんせとお鶴に云へば
母のお弓は我針箱の
紙に包んでハヤ差出せば
云へばお弓はコリヤ志
モーシおばさん暇ぢや程に
南無や大悲の觀音樣と
出て行くのを跡見送つて
暫しお弓が心の思案
嘸や嬉しく思ふであらう
逢へぬ親子の身の上なれば
亂れたる髮帶引締めて
親の十郎兵ェ順禮連れて
金の工面に順禮殺し
金と一緒にある書附を

置いて下されお前の側へ
アイとばかりに思案をいたし
思ふ心は山々あれど
こゝの道理をよく聞きわけて
是非も泣々歸るとすれば
金子取出し我子に向ひ
金は小判も小粒もござる
無理に持たせて髮撫上る
サラバ是から歸りませうと
胸にかけたる鐘をば叩き
云ふに云はれぬ扨泣明し
イッソ親子と名乘りたならば
此處で別れて又何時の日に
連れて戻りて名乘りをせんと
跡を慕ふて行く其内に
いそぎ足にて我家へ戻り
肌に手を入れ取出し見れば
見れば刀のありかも知れる

女房お弓は早かけ戻り
暫し心も泣入る母の
阿波の鳴戸の深みへ落し
云へば十郎兵ェ途方に暮れて
罪を逃れし恥辱を雪ぎ

死骸だき上げ途方に暮れる
お弓お鶴と名乘りもせずに
ホンニいとおし詮方なさに
扨も口惜しお國へ歸り
元のお武家に取立てなさる

八百屋お七吉三

花のお江戸に其名も高き
萬青物渡世をなさる
折も折かや正月なかば
ソコデ八百屋の九兵ェ事も
旦那寺へと假越しなさる
處は駒込吉祥院よ
座敷間數も澤山あれば
八百屋娘はお七と云ふて
氣量能い事十人すぐれ

本郷二丁目に八百屋といふて
店も賑やか繁昌暮し
本郷二丁目は殘らず燒ける
普請成就をする其内は
八百屋お寺は其名も高き
寺領御朱印大きな寺よ
是に暫く假越しなさる
年は二八で花なら蕾
花に例へて申さうならば

立てば芍薬座れば牡丹
寺の小性に吉三と云ふて
氣量能い事卵に目鼻
日頃戀しく思ふて居れど
女心の思ひの丈を
思ふ折柄幸なるか
八百屋夫婦は本郷へ行きやる
ソコデお七は吉三に向ひ
あとの月からお前を見初め
親のある身や人目を兼ねて
今日が日までも云はずに居たが
かねて書いたる其玉章を
扨も嬉しいお前の心
主の心に從ひませうと
八百屋夫婦は夢にも知らず
元の本郷へ引越しなさる
モハヤ普請も成就すれば
夫に附けても俺とお前

歩行姿は姫百合花よ
年は十八薄前髪よ
ソコデお七は不圖慣れ初めて
人目多けりや話しも出來ず
人目忍んで話さんものと
寺の和尚は檀家へ行きやる
跡に殘るはお七に吉三
コレサ吉さんよう聞かしやんせ
日々に戀しと思ふて居れど
云ふに云はれず話しも出來ず
俺が心を是れ見やしやんせ
吉三見るよりさしうつむいて
さらば俺もどうなりませうか
此や打とけ契りを結ぶ
もはや普請も成就すれば
ソコデお七は吉三に向ひ
翌日は本郷へ皆行く程に
別れ〳〵て行くのは嫌やと

實に俺は悲しうござる
俺もお前に別れがつらい
ソコデ吉三は氣を取り直し
後にあはれぬ身じやあるまいし
心直して本郷へ行きな
云へばお七も名殘りを惜しみ
元の本郷へ引越しなさる
店を開いて賣初めなさる
客に招ひて酒盛りなさる
愛嬌よければ皆さん達が
わけて目指すは釜屋の武平
あたり近所の札附き者よ
何卒お七を女房にせんと
文にしたゝめお七に送る
そこで武平はこじれにじれて
其夜お七に對面いたし
口説落して女房にせんと
人の口には戸がたてられぬ

云へば吉三も涙を流し
共に涙で果しがつかぬ
コレサお七やョウ聞かさんせ
又も逢れる時節もあらう
俺も是から尋ねて行くよ
涙乍らに二親共に
八百屋久兵ヱ日柄を撰み
其夜近所の若い衆達を
酒のお酌は娘のお七
我も〳〵とお七を目指す
男よけれど惡心者で
その夜お七を逢ひそめてより
思ふ心を細かに書き
お七方より返事も來ない
サラバ是から八百屋へ忍び
嫌であらうがあるまいとても
思ふ心も戀路の慾よ
人の咄しや世間の噂

夫を聞くより八百屋の夫婦
いつが何時まで一人で置けば
早くお七に養子を貰ひ
夫がよかろうと相談致し
何を云ふても年若なれば
ソコデお七は一間へはいり
トテモ吉三と添はれぬならば
思ひ詰めたる髪剃持ちて
思ふ折柄釜屋の武平
忍び折から様子を見れば
コレサお七や何死にやさんす
言へばお七は顔振り上げて
言ふに言はれぬわたしの心
話し相談した其上に
いやといふたら親への不幸
二世と契りし男にすまぬ
わしのすく人親達否よ
ドウゾ見逃し殺してお呉れ

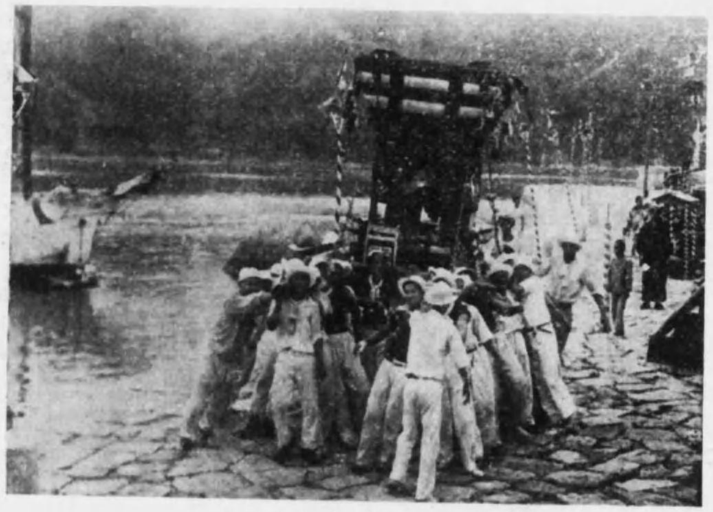
モハヤお七も成人すれば
身分さまたけ邪魔あるものよ
そして二人は隠居ないたす
話しきまれば娘のお七
知慧も思案も唯泣くばかり
覺悟極めて書き置きいたす
自害いたして未來で添ふと
既に自害をいたさんものと
かねてお七を口説かんものと
武平驚ろき言葉をかける
是れにや譯あろしさいがあらうと
コレサ武平さん恥かしながら
親もとくしん親類達も
わしに養子を貰ふと云ふが
親にそむかず養子にすれば
親のすく人わたしはいやよ
アチラ立てればコチラとやらで
聞いて武平は悪心起し

トテモわたしの手ぎはにやいかぬ
コレサお七やよう聞かさんせ
可愛男に逢はれも仕舞ひ
こゝに火を付け吾家を焼きな
婿のはなしもやめにもなれば
夫がよかろうと言はれてお七
直に火を附け吾家を焼けば
さわぐまぎれに釜屋の武平
又も武平は悪心起し
悪いやつらは二人の者よ
直に役所へ訴人を致す
哀れなるかやお七を捕へ
吟味する内ちや獄屋へ入る
夫を聞より涙を流し
元の起りは皆わし故に
其方計りを殺しはせぬよ
併し悪ひは釜屋の武平
せめて一太刀恨みを晴し

去らばこれからだまして見んと
そなたぜんたい親への不孝
トテモそなたが死ぬ氣で居れば
我家焼ければ混雑いたす
可愛男に逢れる程に
女心の淺ゝ故に
家は驚ろく世間じや騒ぐ
八百屋家財を殘らず盗む
わしが轉路のかなはぬ故に
今に憂き目に逢せてやろと
其處で處の役人様よ
町の役所へ引き連れなさる
跡に殘りし小姓の吉三
扨も哀れや八百屋のお七
今は獄屋の憂き目を見るか
今にわたしも未來へ行くよ
わしも産れは侍なれば
夫を土産に冥土へ行こうと

用意支度で探しに行きやる
恨むる刄で一太刀斬れば
吉三手早く止めを刺して
委細残らず書置きいたし
其處でお七は残らず吟味
行くはいづくよ品川表
言ふに言はれぬ最期でござる

本郷邊にて武平に出逢ひ
ウンと斗りに武平は倒れ
首をかき斬り我家へ歸り
直ぐに其儀自害をいたす
罪も極(キワ)れば獄屋を出でゝ
哀れなるかや娘のお七



波止場ニ於ケル櫓廻シ

櫓囃子

清き清水のヨー　菅公が井戸にヨ
　姿うつした　梅の花ヨ
（トコランブノエーホヤエーカサエ）

御手洗港(ミナト)をヨ　素通りすればヨ
　彼妓(アノコ)祈るか　風變るヨ

奮へ若人(ワカウド)ヨ　御手洗育ちヨ
　歴史豊かな　我が町ぞヨ

御手洗女郎衆のヨ　髪の毛は強いヨ
　上り下りの舟つなぐヨ

今宵一夜はヨ　ドンスの枕ヨ
　明日は船底　浪枕ヨ

チョロは出て行くョ　鷗は歸るョ
色の港に　灯はうつるョ

御手洗港をョ　素通る船はョ
親子乘りかや　金無しかョ

瀬戸の御手洗ョ　ありや良い港ョ
今宵假寢の　旅枕ョ

御手洗歴史はョ　人傳(ヒトヅテ)よりもョ
昔變らぬ　浪に聞けョ

齋灘(イツキナダ)からョ　西風吹けばョ
何時も港は　寶船ョ

主は三夜のョ　三日月樣ぢやョ
宵にチラリと　見たばかりョ

青い松葉をョ　ありや見やしやんせョ
枯れて落ちても　二人連れョ

沖の暗のにョ　白帆が見ゆるョ
あれは紀州の　密柑舟ョ

逢ふて嬉しやョ　別れのつらさョ
逢ふて別れが　無けりやよいョ

切れてバラ〳〵ョ　扇の要ョ
風のたよりを　待つばかりョ

遠くはなれてョ　逢いたい時にやョ
月が鏡に　なればよいョ

思ひ出してはョ　寫眞をながめョ
ながむ寫眞は　もの云はぬョ

思ひ出すよぢやョ　惚れよが薄いョ
思ひ出さずに　忘れずにョ

思ひ出すまいョ　とは思へどもョ
思ひ出さずに　居られないョ

切れてさつぱりしよかョ　切れずにおいてョ
浮氣心で　なぐさみよかョ

どうせ一度はョ　騒動のもとぢやョ
騒動起さにや　添はりやせぬョ

騒動起してョ　添はれるなればョ
早く騒動が　起したいョ

惚れて通へばョ　千里が一里ョ
逢はず歸れば　又千里ョ

（一カケ、二カケ、三カケテ、四カケテ、五カケテ橋カケテ、橋ノ欄干ニ腰カケテ下カラ持上ゲリヤ何(ナン)ノコタナイナイ）

（天　鏡　山）

編輯後記

□郷土の歌、まして華な歴史に誇る我等が郷土の歌、其處に吾人は何んなに懷しい想ひを馳せることせうその意味におきまして本集を皆様へお頒ち致したいと思ひます。

□本集出版の動機をお作り下され、且又多大の御援助を下されました今田嘉吉氏をはじめ、快く序文を寄せ下された町長鞆田稔氏、並に歌詞集輯上、寫眞撮影上、種々御援助下されました有志各位に對しまして厚く御禮申上げます。

□名に背かない丈の立派なものをと努力致しましたが材料不足の爲、其意を得ませず、歌詞の中にも文法的に、又語句の上で間違ひの点が、所々あることゝ思ひますが、皆様の隔意なき御示教を得まして、今後ます〳〵立派なものに改訂してゆくことが出來ますならば、郷土の爲誠に嬉ばしいことと思ふものでございます。もと〳〵本集は、我が町の、地理、歴史、傳説、等およそ文化に關係する凡ての事柄を集錄致しまして「郷土誌」とでも言ふ可きものに編纂する考へでございましたが、時日其他の關係上、此の度は「俗謠」のみに止めました、何れ「郷土誌」出版にも着手致し度い希望を持つてゐますので、その折には亦、皆様の御援助の程、お願ひ致します。

昭和十年八月

編者

昭和十年八月五日印刷
昭和十年八月十五日發行　（非賣品）
發行所　廣島縣豊田郡御手洗町　御手洗町青年團
發行者　右同所　代表者　佐藤嵐
印刷者　愛媛縣越智郡富田村大字宮田村五二三番地　窪田佳津見
印刷所　愛媛縣今治市大字今治村甲六〇七番地　原商會印刷部

終